
taboo

稲垣優

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t a b o o

【Nコード】

N 7 5 5 2 G

【作者名】

稲垣優

【あらすじ】

天使・悪魔・人間が共存するシーゼル王国。しかし、実際は共存とは名ばかりの、荒れ果てた国だった。奴隷扱いを受ける人間に、犬猿の仲の天使と悪魔。そんな国に生まれ育った、悪魔のラディン。彼は、禁忌だと知りながらも、天使のレイチエルを愛してしまう。禁忌の恋に悩む彼らが出会う、さまざまな形の禁忌の恋。少し悲しい恋物語、貴方も読んでみませんか？

introductory chapter:00

此処は樂園と呼ばれる国だ。

東側を海に、西と北側を山に。そして、南側を国境に大きな国と隣同士になっている、シーゼル王国。

この国は、付近の国々……いや、世界中から樂園と呼ばれている国だ。

人間、天使、悪魔。

この、世界の理と言っても良いくらい破滅的に相容れることの出来ない三種族が、実に理想的な形で共存を果たしている国だ。

そう、まるで夢のような話が実際に実現している、国。

まさに理想郷。

そんな風に、俺の故郷でも噂されていた。

「よお、兄ちゃん、見ない顔だな？この辺は初めてか？」

仕事の都合で、親の元を離れて一人、この国へと旅立った夜。
早くもホームシックというものが訪れて、俺は寂しさのあまり、飲めもしない酒を飲み、明るい雰囲気酒屋へと足を運んでいた。
その店長らしき人物は、恰幅が良く、豪快な笑顔で客と話をする、感じの良い悪魔の親父だった。

「ああ。この国には、初めて来たんだ」

「この国？へえ、シーゼル王国に来るのが初めてか！じゃあ、驚いただろう？ははは、同じ店に三種族が揃うなんて、この国以外じゃ考えられねえな！」

親父は、気持ちの良い笑顔で笑った。

あはははは、ダノブの野郎、この国から出たこともねえのに、知ったかぶってやがる！！

俺の後ろに居た、常連らしき、天使の男が、大笑いをしながら、野次を飛ばす。

まわりの男達も、一緒になって笑い出した。

ダノブ、と呼ばれた店長の親父は、「うっせえな！余計なこと言つてんじゃねえ、このチンピラども！酒ださねえぞ！」と叫んだ。
叫んだ、と言っても怒鳴った訳ではなく、言い合いを楽しんでいるような感じだ。

おいおい、そりゃねえよ、ダノブ。俺たちや、此処に酒飲みに来てんだぜ？　つか、どってなんだ！俺達は何も言つてねえぞー！

「で？どこから来たんだ？」

「あー、海を越えて、もつとずっと向こう側さ」

「そんな遠くか？そりゃ長旅だっただろう？」

「まあなー」

「それだけ遠くちゃ、この国の事も何もしらねえだろう？」

「そうなんだ。右も左もわからねえよ」

「あはは。そうだなあ、俺が教えてやろうか？此処にいる、他の酔っ払いよりはマシだと思うぜ？」

「そりゃ助かる。頼むよ」

親父は、コップを洗う手を止めて、身を乗り出して話を始めた。周りは笑い声や怒鳴り声などの、騒音ばかりだ。

「この国がなあ、楽園、なんて呼ばれるようになったのは、つい最近なんだ」

「え？でも、三種族が共存を始めたのは、今から数十年前だって……」

「ああ。その数十年の間、人間は奴隷、天使と悪魔は犬猿の仲。国

の雰囲気は何処も最悪でな、共存なんて名ばかり。楽園とは程遠い状況だったんだ」

「へー。この国にも、そんな時代があったんだな？」

「まーなー。もちろん、異種族どうしの恋愛なんてご法度さ！誰にも、そんな考えなんて無かったけどな。……あー、そう言えば、一人だけいたっけな、馬鹿な男が」

「馬鹿な男？」

「ああ。悪魔の男なんだがな、こいつが馬鹿なことに、天使の女に惚れちまったっつー話があるんだ」

「ほう、それで、その男はどうしたんだ？」

「お、この話に食いついてきたか？」

「ああ。そういう話が好きなんだ」

「そうなのか？ああ、そうだ、あんた、名前は？」

「俺か？俺は、ヴァーダ」

「ヴァーダ、そう急ぐなよ。夜は長いんだ。まあ、酒でも飲みながらゆっくり話そうぜ」

親父は、ビールを俺のカウンターの上に置いた。そして、にっと笑う。

「その男の名は、ラディン。世界一、馬鹿な男の名さ」

国の光と闇。

すなわち表と裏の歴史。

どんなに素晴らしい主君を持った国でも、汚い歴史と言うものは存在する。

それは、どうあっても避けられないものだ。

しかし、たいがいの場合には汚れている国の真実を、すべて綺麗なヴェールで覆い隠してしまう。

人というものは、どうしてか、裏の歴史と言うものを語りたがらないものだ。

もちろん、その国の一部である私も、裏の歴史を今まで率先して隠してきた。

そうしていけば、いつか裏の歴史は消えて行く。

誰の記憶にも存在しない、何の記録も無い、そんな歴史は無いも同然だ。

けれど、それではいけないのだ。

どんな歴史でも、私たちが住むこの国の歴史であり、それを受け入れて生きていかななくてはならない。

それが、国の正しい在り方だと私は思う。

だから、此処に記そうと思う。

この本は、私が今まで見聞きした、シーゼルの裏の真実を解き明かしていく話である。

～イライン著「シーゼルの闇」前文より～

大都市ヴァンティール。

それは、このお世辞にも治安の良いとはいえないこのシーゼル王国で、最も治安の良い都市。

その都市のとある天使の貴族だけが通う学園。

白一色、と言った外観の、気品溢れる建物。

白以外の色は、てっぺんに立っている、この国の国旗の色だけ。

その他は全て白で、本当に此処が勉強をする為に使う場所なのだろうか、と思ってしまう。

その立派な建物……の、敷地の隅の隅。

其処には一人の天使の少女が、落ち込んでいた。

丸くなって、小さくなって、そしてぶつぶつと文句を垂れている。

「うゝ、今日も失敗しちゃったよゝ。なんで、いつも爆発しちゃうんだろう?」

爆発。

そう、彼女は魔法の実習の時間、少し規模の大きい爆発を起こしてしまったのだ。

どのくらいの規模かと言えば、教室が一つ丸焦げになって、全ての窓ガラスが割れて、ガードが間に合わなかった同級生が軽傷を負ってしまった、その程度。

それは、彼女にとっては日常茶飯事なのだ。

「ヴィレイト先生も厳しすぎだよ!あの部屋を一人で片付けろなんて……。まあ、魔法なんて日常生活で使ったことなんてないから、魔法禁止令はどうだっていいけどさっ」

ぶつぶつ。ぶつぶつ。

あーあー、うるせえ。

もう、かれこれ三十分は喋りっぱなしじゃねーか。そんなにむかついたのか、そのヴィレイトに？

「もう、ほんとに最悪！！」

「何がだ？」

いつまでも独り言を言っていたんじゃ可哀想だ、と思って声をかけてやったのに、相手は吃驚したような声をあげた。

失礼な奴だな。俺はずっとお前の文句を何も言わずに聞いてあげたっつーのに。

「もう居たんだ、ラディン」

「おー。昼寝してたのに、どっかの馬鹿みたいな叫び声で起きたんだよ」

「馬鹿みたいってどういう意味！」

「いや、レイチェルの声のことだけど？」

俺は、壁に向かってにやりと笑った。

けど何も壁に向かって話をしている訳ではない。

話をしている人物が居るのは、この壁の向こうだ。

とある事がきっかけで、俺とレイチエルは壁越しに出会い、毎日のように壁越しに話をするようになっていた。

この白一色の学園の隣りには、悪魔の貴族の学園が建っている。そして、学園同士を行き来するために使われている出入り口が、この近くなのだ。

だから、もしかしたら悪魔に出会うかもしれない。

そう思い、この辺りには天使は誰も寄り付かない、と言う話だ。当然、それは悪魔だって同じ。

天使に遭遇してしまうかもしれない場所になど、誰が好き好んでやってこようか？

いや、実際に俺は此处へ通いつめているの訳だが。

「うわっ！そういうの、感じ悪い！馬鹿はどっちよ、ラディンのばーか」

「はっ。罰掃除なんて受けてる奴がよく言っぜ」

しかし、この壁越しに話をしているレイチエル。

皆さんもお気づきだとは思うが、レイチエルは白一色の学園の生徒。俺は、黒一色の学園の生徒。

つまりは、レイチエルは天使、俺は悪魔、と言うこと。

俺たちは自分の種族についての話をした事がない。

分かっているのだ、二人とも。

そのことを追求してしまえば、二度とこうやって会話は出来ないという事を。

少なくとも、俺はレイチエルに惹かれている。

レイチエルだって同様だ。俺のことが嫌いなのなら、こんな所に来たりはしまい。

……それは、三歳児でも知っている事だ。

悪魔と天使の恋は、禁忌。

「ねえ、ラディン。今日はなんか疲れてるね。何かあったの？」

「まーなー。最近疲れててさあ。授業出んのもかつたるくて此処で昼寝してたんだけど」

「ああ、私が起こしちゃったんだ？ごめんね」

「いや。別に、そろそろ戻らねーと、って思ってたところだったから。むしろ起きてラッキー」

「そっか。もう戻っちゃうの？折角来たのに」

「しゃーねーだろ。また明日来るからさ」

「明日はいつもの時間？」

「おう。多分な」

「分かった。じゃーね。授業頑張って」

「ん」

よし、とラディンは立ち上がった。

レイチエルの居る建物とは対照的に、真っ黒の建物に向かって、歩き始める。

すべてが黒、と言うのは個人的には嫌いではないが、やっぱり、奇妙かもしれない。

とは言っても、此処に住んでいる人間は、この景色を見慣れている。全部黒の建物も全部白の建物も、この都市に住んでいる者にとっては、普通の景色なのだ。

俺は、悪魔に生まれた事を後悔した事はない。

悪魔の象徴である、黒だって一番好きな色だし、悪魔に生まれて嫌な思いをした事はない。

そう、悪いのは悪魔に生まれた事ではない。

悪いのは、この世界の常識だ。

天使と悪魔の恋が禁忌だということに、理由は無い。

理由、それをあえて上げるならば、天使と悪魔の不仲だろう。

天使と悪魔の不仲、そして奴隷、それはこの国の歴史に深く関わる。話すと長くなるし、歴史の教科書みたいに細かく覚えていく訳でも

ないので、此処では省いてしまおうと思う。

そう、天使と悪魔は、相容れぬ存在だ。

何においても正反對。

それぐらいは、いくら馬鹿な俺でも分かっている。

けれど、俺はレイチエルに出会ってしまった。

レイチエルに出会ったことがいけない事だ、とは言わないし、言われたくも無い。

姿を見たことも無いような女、そして、天使だと知っているはずなのに、俺は悪魔だと分かっているのに、俺は——レイチエルに、惹かれてしまった。

だったら尚更あの場所へ行っではいけない、と何度も言い聞かせているのだが、どうしても、あの場所へと足は向いてしまう。

結局、授業なんて真面目に聞かず、夜になるまで教室で眠っていた。

空が、俺の好きな黒色をしている。

所々、点々と白があるが、基調の色は黒だ。

俺は夜が一番好きだ。

ふと立ち寄った、メインストリートから外れた裏道。
近道だしな、とたまたま通っただけだった。

「んあ？」

二人並ぶのがやっと、と言っくらいの狭い道の真ん中に、雑巾かと間違っかのような、小さなガキが横たわっていた。
ガキは眠っているのか、俺に気づいてはいない。

なんだか好奇心がそそられて、俺はつい、話し掛けてしまった。

「お前、名前は？」

シーゼル王国の歴史は、浅い。

昔の歴史を辿れば、この土地に住んでいたのは、人間だけだった。天使も悪魔も、この土地から遙か南北へと行った場所に、それぞれが住んでいた。

けれど、天使と悪魔は、破滅的に仲が悪かった。

何時だって一触即発。

だが、共に資源が少なかったのだ。

鉄も食料も無く、とても戦争に耐えられるような状況ではない。

そして、資源を求め、天使の国も悪魔の国も植民地を捜し求めた。

そこで目をつけたのが、今のシーゼル王国のある土地だ。

シーゼル王国を、丁度真ん中から南北に割って、天使と悪魔が支配した。

いくら資源が無いとは言え、天使と悪魔は、双方とも戦闘に向いている種族。

人間が敵う訳も無く、人間は奴隷としてその土地へと住まう事になり、人間たちは今までの暮らしが消えた。

そして、資源も充分に手に入り、戦争の始まり。

それから三年の戦いを経て、双方のトップに立っていた人物が、ほぼ同時に亡くなるという事件がおきた。

次の王へと戦いは受け継がれ、そしてこれ以上戦いをしていても互いに損をするだけだと察した王達は、痛み分け、と戦争を止め、一つの国を作った。

それが、シーゼル王国。

が、もとは犬猿の仲だった天使と悪魔。

その溝は今でも埋まらず、その事件から百年が経った今でも、天使と悪魔が共存、と言う体制は取れていない。

人間も然り。

天使と悪魔の貴族の元で働いている人間は、酷い扱いを受けている。天使も悪魔も、人間を労働力としてしか見ておらず、生き物として対等に見ることは、無かった。

粹

～イライン著「シーゼルの闇」から抜

上記で書いたとおり、人間はたとえ女だろうが子供だろうが、『飼い主』が気に入らなければ、のたれじぬしかない。

だから、シーゼル王国で一番治安の良と言われるヴァンティールでは、ボロボロになった人間の死体が転がっている事は決して不自然な事ではない。

ちゃんと、そういうのを処理する機関が存在して、まとめてゴミ捨て場みたいな所に人間の死体を埋めるのだ。

そう、だから目の前に居るこのガキも、決して不自然な存在ではないのだ。

恐らく、こいつを飼っていた飼い主に反抗したか、母親が飼われていただけなのだろう、と予想する事すらできる。

けれど、何故か分らないが、俺の胸には期待に似た、高揚感……好奇心、も混ざっているのかもしれない。

そんなワクワクが、俺の胸を支配した。

「お前、名前は？」

そう、俺が言うと、ガキは俺の目を睨んだ。

ギラリ、と効果音がつきそうなくらい、目つきが悪い。

おお、と俺は感心した。

あんだけチビで、此処まで迫力が出せるんなら、合格だな、と。
この目を俺のクラスの馬鹿どもに見せてやりたい。

ガキは、立ち上がって、俺に向かって走ってきた。

何をすんのかと思っていたら、棒を振り上げ、俺に殴りかかってきた。

が、俺は片手で棒を受け止め、それでも噛み付いてこようとするガキを、弱めに蹴った。

弱めに蹴ったはずなのに、ガキは吹っ飛んでいった。

が、またガキは立ち上がり、今度はただ睨んだ。
近づくな、と目だけで訴えているようだった。

……面白い奴。

「名前は？」

しつこく訊いてみても、ガキは目の力一つ変えず、俺を睨むだけだった。

やっぱり、面白い。

このまま立ち去っても良かったのだが、なんだかそれも勿体無いような気がして、俺はポケットの中を探る。

食いもんでもやれば恩を感じてくれるだろうかと思っただが、生憎食べれるようなものは持っていなかった。

けれど、代わりにあったのは、ブレスレットだった。

…あー、これ拾った奴だ。

まー趣味は悪くは無いと思うが、俺の服に合うようなデザインではないため、今までポケットに入れっぱなしになっていたやつ。

うーん、別にいらないしあげても良いが、こんなもの貰っても嬉しいだろうか？

まあ、質屋でも売れば金になるだろうし、貰って損になるようなものじゃ、ない、だろう。

「これ、やるよ」

「？」

「まー、お前は要らないだろうけど。欲しい奴だっているだろうし、売りゃ金にだってなんだろう」

そう言っただけ、俺はブレスレットを投げた。

ガキの目の前にそれは落ちて、ガキはそのブレスレットをじっと見た。

……もしかして、ブレスレットを知らないのだろうか。

まあ、其処まで面倒を見ようとは思わない。

俺は、百八十度反対の方向を見て、歩き出した。
ガキは、もう俺に襲い掛かっては来なかった。
俺も、振り返る事は無かった。

なんだか、得をしたような気分のまま、俺はまた近いうちにアイツに会える、と何故か確信していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7552g/>

taboo

2010年10月10日06時15分発行